
龍の瞳が視（み）えし物

倅臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

龍の瞳が視^みえし物

【Nコード】

N0619I

【作者名】

倅臥

【あらすじ】

奥州が独眼龍、伊達政宗の話。政宗の目指す天下、好敵手幸村との対決。…様々な思いを経て龍が視るものとは。

01 龍

時代は戦国……。

各地で武将が鬨を上げ天下を狙う世。

次々に起こる止むことなき戦場を駆け抜ける武将達は何を思っただろうか。

ある者は天下を、ある者は力を、ある者は愛を求めて次々と切り開いていく。

そんな思い渦巻く世界の中、孤高の高みを求めるべく猛る男が此処に一人……。

* * *

「つらあああ！」

まるで獣のような咆哮を上げ刀を振るっては敵を一蹴し薙ぎ払う。人の波が押し寄せようが何をしようがそれはまるで赤子の手を捻るように簡単に、そして蜘蛛の子を散らすように崩れていく。

実に力の無い足軽連中が、それでなくても多少力のある鎧纏う武将でさえ吹き飛ばす力を持つというのだ。

さぞかし巨大な体躯で筋骨隆々とした大男に違いない……と思うだろうが、そこにいたのは鋭い弦月の前立て飾る兜を被り青空のような蒼を纏った「青年」だった。

「Ha!!全然足りねエな、もつと死ぬ気でかかってこいよ！」

にい、と口元に弧を描きながら青年はそう挑発する。

その挑発に乗ったのか否かは知れずとも、周りを囲った兵士達が「
やあ」だの「この」だの言いながら飛び掛っていく。
だが結果は 先に述べたとおりだ、彼に触れる前にその石垣のよう
に群れた連中は軽々と宙を待って地にひれ付すのだった。

「ったく、こつも雑魚ばかりじゃあな」

温い戦は好きじゃねえんだ、青年はやや舌打ちしながらそう呟いた。
周りには怖気づいてひいひいと情けない声を上げて逃げる者やその
場でへたれこんで尻餅をつく者など様々だったが全員の顔には恐怖
が張り付いていた。

そんな連中を見て、青年ははあ、と盛大に溜息を吐く。

「弦月の前立てに隻眼 …… やっぱり、お、奥州の独眼龍 …… 伊達、
政宗…！」

ひいひいと喚く悲鳴の中ぽつりと一人の兵士がそう呟いた。

青年はソレを聞き逃さなかった。

自然と口元が釣りあがる。

「それが分かったところで遅エよ、独眼龍は伊達じゃねえ …… yo
u see?」

ぶん、と刀にべつとりと付いた血糊を払いのけると同時に遠くでも
くもくと狼煙が上がリ、あちこちで勝ち鬨の声が上がった。

其の声は随分聴きなれたもの、まさに己の軍のものだった。

青年 …… 否、奥州の独眼龍こと伊達政宗はその狼煙をじいとその隻
眼で見つめた。

* * *

「政宗様」

奥州への帰り道を騎馬で徒党を組んで帰っていく中、自分の隣を走る腹心に政宗はふいと視線をそちらへやった。

「どうした」、その声をかけながら。

「今回の戦、何か不満でも」

「不満も何も」

大将首は獲れねえし周りは雑魚ばかりで張り合いがねえしで、と文句をつらつらと並べていく。

至極不満そうな顔はどこか年相応に見えた。

年相応。

政宗は実に年相応の仕草はあまり見受けられない。

若干19歳にして一国の城主、さらには小さき頃に負った病での辛く厳しい環境…それが重なりに重なって政宗からそれを奪ったのかもしれない。

実際に顔は実に精悍な顔立ちをしており、刀の鏢つばに紐を通したような眼帯の周りに落ちる影は切れ長のもう片方の瞳をよりいっそう鋭く見せている。

その顔で年相応、となると中々に少ないのかもしれない。

そんな政宗の横を走り、淡々と文句を聞き続けてもなお動じもしない男は

「とはいえ、策は上出来でしたな」

そう、口元をやや吊り上げて言うのだった。

「まあな、流石は右目といったところか？小十郎」

小十郎、それが政宗の横を走っている男の名だった。

またの名を龍の右目と言い、本名は片倉小十郎と云う。
伊達家に仕う家臣のひとつである。

だがしかし小さい頃からの付き合いのせいだろう。
いまや政宗の腹心でもあり父でもあり兄でもあった。

容姿はといえば髪を横に撫でつけ、鋭い目線にがっしりとした体格
陣羽織には己が家紋である九曜紋と「仁」「義」の文字、そうして
背中には片割れ月が描かれている。
しかし、それよりも何よりも目に付くのは彼の左頬に走るその傷だ
ろう。

その傷のせいか、どこか怖さも感じる。

気の弱い武将ならそれで追い返せそうだった。

「お褒めにあずかり光栄です。ですが……どう見ても先の軍隊……妙
です」

「妙？」

小十郎が話しているのは先程沈めて来た軍のことだろう、政宗はそ
の話が出ると顔を顰めた。

目線に「どういうことだ」と言わんばかりのものを含めてじ、と小
十郎を見る。

小十郎は一度考え込んだような仕草をしてから口を開いた。

「我々の背後をついたことに関しては策だと思えば理も通りましょ

う。ですが、軍全体を見ればあまりにも少なすぎる。我々の半数あるかないかでしたから」

小十郎の言っていることは正論だった。

戦は誰も怪我をすることもなくあっけなく幕を閉じたのだ。

政宗が無傷で、しかも本気を出すこともなく、実にあっけなく。

「…つまり、何だ。あいつらはどっかの噛ませ犬だったと？」

「無くはありません。豊臣や織田……大きな勢力が我らの力量を測り、生かすに値するか見極めている、という可能性も」

「…それはねエだろ。少なくとも豊臣なら分からなくもねエが……魔王のおっさんなら」

「徹底的に叩き潰し、根絶やしにするだろう？」真剣な面持ちで政宗は小十郎にそう語った。

政宗の言うことは正しい。

霸王と呼ばれる豊臣秀吉は各地で武将連中を軍へ招こうとしている動きもある。

方や魔王と呼ばれる織田信長は己が妻の出身地まで女子供問わず焼け野原にしたとも聴いている。

力量を測るどころどころならば前者がありうるだろう。

「とにもかくにも、国境付近の警備を強化し、色々と警戒した方が……」

良い、と最後まで言う前に小十郎の言葉は止まった。
そんな小十郎に政宗はぱちくりと瞬きした後不審そうに横顔を見やるが。

ヒヒインッ……

急に闇夜に甲高い嘶きが響き渡り、政宗の馬が身体を仰け反らせて前足で宙を掻いた。

「お、わっ ……!!?」

政宗は常に手綱無しで馬に乗る癖のようなものがある、そのせいか見事にその場へと落馬してしまった。

周りの人間 小十郎含む は「政宗様!!」だの「筆頭!大丈夫ですか!?!」だのときゃあぎゃあ騒ぎ出した。

流石にそれだけ騒がれると色々とまずい、そう判断したのか小十郎は怒鳴ってそれを鎮めた後にばつの悪そうな顔をしてみせる。

「ってエ……なんなんだ ……ん?」

立ち上がるうとした其のとき、手に何か感触がありそれを摘んで眼前に掲げると、それは巻き菱であった。

一瞬「何でこんなものが」と思ったが、よくよく考えれば今現在自分達がどこにいるかを考えれば納得が行く気がした。

「待たれよ!!貴殿ら、一体何者だ!!!!」

喧騒も鎮まって静かになった暗闇の中、凜とした大声が響き渡るのだった ……。

02 龍虎邂逅

「待たれよ！！貴殿ら、一体何者だ！！！」

闇夜に響く凜とした声に政宗と小十郎、およびそれを取り巻く伊達軍はおのおの鋭い目で声の主を探す。

今は鬱蒼うつそうと茂った森のせいだろうか、周りが非常に見えづらい状況下にある。

それでも政宗と小十郎はしかと感ずることができた。

その闘志と、それに比例するように強調された気配を。

気配を察知できるのはそれだけ政宗と小十郎が優れた武人であるからだろう。

「周りを囲まれては…いないようですが…今此処は甲斐の国、なれば」

甲斐、というのは奥州に隣接する国のことで、奥州を治める政宗が「龍」と称されるならば甲斐の国を治めるその人は「虎」と称される人物だった。

また、その「虎」には「虎の若子わじ」あるいは「紅蓮くれんの鬼」と称される懐刀ふところと、その若子が束ねる優秀な忍隊、そしてどこにも劣らぬ立派で、かつ強靱な騎馬隊が存在する。

どれもこれもが名の知れたものだった。

先の戦が起こったのは奥州から甲斐を抜けてほどなくしてのところ。なれば奥州に戻るには甲斐を抜けるしかない。

「……Hun、成る程な。どうりで」

撒き菱なんぞがバラ撒かれてるワケだ、と政宗はぱんぱんと砂埃を払いながら立ち上がり、やがて急激に近づく気配が出てくるのを待った。

気配は叢むらみと少々木々を軽々飛び越え、彼らの前へと躍り出るのだった。

「貴殿ら、ここが甲斐の虎が治める国と知っていたの狼藉おかしなか！」

政宗らの前に躍り出たのは、政宗と年がほぼ変わらないくらいの青年だった。

少々あどけなさが残る精悍な顔立ちに栗毛の長い髪を後ろで結わえ、額には紅い鉢巻。

政宗が蒼い空の色をしているならばこの青年は烈火の如き紅蓮こうれんを纏っていた。

「Ha、知ってるが俺にゃあ関係ないね。それより紅いの、そこをどいてもらおうか」

「そうでないとは帰れないじゃねエか」と鋭い目つきを更に鋭くして低く唸った。

他の連中も「そうだそうだ！」だの「さっさと道を開ける！！」だのと騒ぐもすぐに小十郎によって静止させられた。

だが、紅い青年はぴくりとも動かず、何か解げせぬ物でも見るかのようについた表情でいたものの、政宗の「紅いの」発言には顔を顰しかめた。

「紅いの……？ 貴殿、一介の武将に対して失礼でござる……！」

紅いのは随分と声が大きいようだった。
低く唸る政宗に吠え掛かる。

「失礼も何もないね、俺アアンタのことなんざ知らねェんだ」

はん、と鼻で笑ってみせる。

隣で小十郎がやれやれと言った様子で額に手を当てて盛大な溜息を吐いた。

それは、政宗が無知にたいしてのことなのか、はたまたやや挑発気味の笑いにたいしてなのかは知らないが。

ともかく、挑発ととれたらしい紅い青年はむっとした表情で己の武器である十字槍をぎゅう、と握り締めた。

その拳はわなわなと震えている。

「貴殿、名を名乗られよ！！某は真田幸村！甲斐が虎若子にござりまする！！」

紅い青年 真田幸村 はそう高らかに宣言し、両手にある槍を構えた。

そうして吼えるのだ。

「どこの武将だとはいえどここを通すわけにはいきませぬ！！」
と。

伊達の連中はまだぎゃあぎゃあ騒ぐかと思つたが小十郎に怒鳴られるのはごめんなのだらう、しん、と静まり返っていた。

変わりに、小十郎が馬を下りて脇差の鯉口こいくちに手をかけながら政宗の一步前を出てちらりと目配せし、口を開いた。

「政宗様、ここはこの小十郎が…」

「いい。俺がやる」

「ですが」

「Shut up、小十郎」

小十郎の言うことを聴かず流暢な南蛮語 英語のこと、ここでは南蛮語と称すことにする でぴしゃりと言葉を締め切るとすい、と小十郎の前に出た。

その様子を見てまた盛大に溜息を吐く。

このままでは小十郎の胃が危機になるかもしれない : それは胃痛的な意味で。

「いいねエ、丁度 温ぬるい戦で身体くすびが燻くすつてたところだ」

すらり、と日本刀を抜く。

僅かに洩れる月光にその銀の軌跡まきせきが浮かび上がった。

「奥州筆頭 伊達政宗 …… 押して参る」

ふ、と雰囲気が変わった気がした。

回り全体がとげとげしくなったような、そこだけ温度が下がったような …… ともかく真剣だということはイヤにでも分かった。

「なんと …… 貴殿があのだ」

独眼龍、と幸村は驚いたように呟いた。

荒れ狂う奥州を短期間で纏め上げ僅か19歳で国主となった男。弦月の前立てに隻眼。

その話は幸村にも聞き及んでいたようだった。

「小十郎！ 手エ出すんじゃねえぞ！！」

「はあ…全く…承知いたしました。ご存分に」

小十郎の言葉は半ば諦めを含んでいた。

手を出すなど言われれば家臣である己が動けないのもそうだが、そう言って絶対に決めてしまつと主である政宗はまったく言うことを聴かなくなるのだ。

そりゃあもう好きなことだけやりたがつて好き勝手やっていく子供のように。

そうなると普通の子供よりも性質たてが悪いのかも知れない…あくまで年齢的な意味で。

「先まに来な、こちららウォーミングアップはもう済んでいるもんでね」

いつでもこいと言わんばかりに構える。

幸村は南蛮語なんぞ知るわけが無かったが文章の内容を要約するに普通に挑発には違いなかった。

あちらから来いというのだ、幸村は遠慮なくぐ、と槍を握る手に力を込めて地を駆けた。

「う…おおおおおおお！」

どこか獣にも聴こえる咆哮を上げながらぶん、と風を斬る音と共に右の槍を神速で突き出す。

もちろん狙いは……心臓だ。

ガキインン…

手ごたえはある。

だがこの甲高い独特の金属音に幸村ははた、と動きを止めた。

自分なりには自信はある、だが目の前の男は……。

「ふん……悪くは無エな」

簡単にその一撃を受け止め、また金属音を響かせてそれをいなす。

「……はあっ！！」 烈火” ああああああ！！」

ゴウツ、と周りの空気を切り裂きながら神速の連続突きを放つ。

政宗はそれを難なくかわしているも服や鎧や兜に何度か掠り、わずかな傷を作っていく。

だが避けきれない速度ではないな、と思う反面政宗は胸底から湧き上がる”何か”を感じ取っていた。

戦場で感じる高揚感にも似た……いや、それ以上の高揚だった。

が、それを感じているのは政宗だけではなく、幸村もだった。

幾度となく槍と刀が交じり合い離れてはまたぶつかってつばぜり合いとなる。

方や否妻を纏った刀で斬りつければ、炎の拳で応戦する。やがて政宗は確信するのだった。

この男が、真田幸村が、己が命を賭してでも全力を尽くせる相手だと。

「お、おい……ありやあまさか」

二人の戦いを見やる伊達軍兵士の一人がぼつりと声を上げた。

彼の目線の先にあるのは……腰に下げた六本の刀すべてを片方に3

本づつもった政宗の姿だった。

「筆頭が六爪を … 抜いた!!」

「マジかよ……あの紅いのやるなあ」

「こんな俺らが手出しできるってレベルじゃねエって…」

兵士達が驚くのも分からなくも無い。

元来刀というものは基本的に一本、それに加えて脇差を含めても計2本が主流である。

だが政宗はそれを大幅に超える3倍の6本だ。

もちろん刀というのは一本一本に相当の重さがあるが、政宗はそれをいともかたんに片方3本ずつで操る。

傍から見ればそれは異形であり何より常識を遥かに超えた破格のものであった。

ちなみにそれを政宗は「六爪流むくわうりゅう」と呼んでいる。

”爪”と称されるのは彼が龍と称されるからであろう。

だが幸村も幸村で実は戦国の世においては珍しい。

幸村の持つ十字槍というのはここ日ノ本ひものほんにおいてはごくごく普通に使われる槍だ。

基本的には両手で持ち扱うものだったが、幸村はそれを片方に1本ずつ、つまりは珍しきかな2槍流なのである。

「Ha!! いいねいいね……ゾクゾクするぜ……」

に、と口元を吊り上げてやや息を荒げながらそう言ったものの、本心では「なんだコイツ」だの「強いな」だのと感情が渦巻いている。ただ其の中で最も突出しているのは、幸村との勝負に対する楽しみと、負けたくないというその気持だった。

「貴殿も中々やる……流石は独眼龍と称されるだけのことはある……」
こちらもやや息を荒げながらそう笑って見せた。
互いの笑みは楽しそうなもので、ぜえぜえと聴こえる荒い息遣いで
も喋る余裕はあるようだった。
かなりの長時間の勝負、体力ももう少ないか。
傍らで見やる小十郎はそういうことを感じ、悟った。

次の一撃で勝敗が決まる。

と。

そう思ったと同時に二人ともが己の獲物を構える。

「はっ…次でお終いにしようや、真田幸村」

「望むところ、なれど某負けはせぬ!!」

ひゅ、と互いに一息すって吐き出すときっと目つきを変えて獲物を
握る手を強める。
そして…。

「いぞ尋常に…」

「a i l l r i g h t、癖になるなよ ……」

「勝負ううう!!」

「押して参るっ!!」

互いに地を駆け互いに刃を交えるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0619i/>

龍の瞳が視（み）えし物

2010年10月10日13時57分発行